

# 初年次学生の国際的視野を育むアクティブラーニング －アメリカ人高校生との交流プログラム実践報告－

望月 肇\*・坂内 宏行\*・野口 隆\*・上江 憲治\*

## An “Active Learning” Project Fostering a Cosmopolitan Outlook in our First-year Students with our Teachers’ Support and Cooperation

－Report on International Exchange with American High School Students－

Hajime Mochizuki\*, Hiroyuki Sakauchi\*, Takashi Noguchi\* and Kenji Kamie\*

### Abstract

Recently, some of the first-year students seemed not to have enough study experience from their junior high-school years. Therefore, “first-year experience at college” is important in order to support a smooth transition from secondary education to higher education. We designed an “active learning” project to foster a cosmopolitan outlook in our first-year students with our teachers’ support and cooperation. We received 36 American high school students escorted by 5 teachers from Bear Creek High School, Colorado, U.S.A. at our college on June 16-17, 2008. We carried out the following activities: (1) Japanese students taught basic Japanese greetings to American students in a small group, (2) Japanese students taught daily conversation to American students in a small group, and vice versa, (3) Japanese students taught Japanese calligraphy and origami paper craft to American students and completed art works by cooperating with each other. According to the post questionnaire answered by our college’s first-year students, 73.3% of the students had the positive impression towards the international exchange. However, their positive impression varied with each activity: (1) 33.4% < (2) 62.6% < (3) 71.4%. In the future, we need to design activities that will enable both Japanese and American students to communicate more actively and cheerfully.

**Keywords** : first-year experience at college, cosmopolitan outlook, teachers’ support and cooperation

初年次教育、国際的視野、教員の支援と協力

### 1. はじめに

近年、学力・学習目的・学習動機・学習習慣の多様な学生が高等教育機関に進学するようになる一方で、卒業時の質の保証が求められるようになり、入学した学生を高等教育に適応させ、中退などの挫折を防ぎ、いかに成功へと導くかが課題となっている。このような高等教育を取り巻く環境の変化に対応するため、中等教育から高等教育への円滑な移行を支援する「初年次教育」が注目を集めている。

初年次教育は1970年代後半から80年代前半にかけて、アメリカ合衆国の多くの高等教育機関で導入され、学生の中退率抑制や学生の成功に有効な教育プ

ログラムであることが評価され、日本においても、2007年12月に初年次教育学会が設立されるなど、初年次教育に対する期待が高まっている<sup>2)</sup>。

近年の日本における初年次教育の動向として、2006年度に文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」に採択された、関西国際大学による「初年次教育の総合化と学士課程教育への展開」において導入された、「アクティブラーニング（Active Learning）」という教育方法が注目されている。アクティブラーニングとは、従来型の一方的な講義形式ではなく、グループワークをはじめとして、学生が授業に能動的に参加するような学習形態または教育方法を指す<sup>3)</sup>。

本校においては、濱中他により、「課題学習（創造性教育）」の実践が、2005年度、2006年度は商船学科1年生を対象に行われた<sup>6)</sup>。2007年度は電子機械工学科1年生を対象に行われ<sup>7)</sup>、2008年度は情報工学科1年生を対象に行われている。小グループの学生による「計画・実行・まとめ・報告」という一連の学習活動を、複数の教員が連携して指導することにより、自ら考えて行動する能力を育成するこれらの教育実践は、アクティブラーニングの本校における先駆けとなっている。

本稿では、初年次教育の重要性と、本校の教育方針にも掲げられている「国際的視野を持つ人材育成」という観点に基づいて企画した、アメリカ人高校生と本校1年生全員との2日間に渡る、本校での交流プログラムの実践について報告する。

## 2. 本教育実践の目的

本教育実践は、本校の3つの教育方針の中の1つである「(3) 日本および世界の文化や社会に関心を持ち、国際的視野でものがみられ、しかも人間として、技術者として高い倫理観をもった人材の育成。」<sup>8)</sup>に基づいて計画されている。

また、先述した初年次教育の重要性を踏まえ、従来の一方的な講義形式ではなく、グループワークなど、学生が能動的に参加する、アクティブラーニングの教育方法を取り入れ、複数の教員が連携しながら、小グループの初年次学生に対して「国際的視野を持つ人材育成」を目指すことを目的とする。

## 3. 本教育実践の実現までの経緯

本年3月初旬に、昨年度の本校英会話担当講師 Matthew Winfield氏を通じて、アーク外語学園より「6月15、16、17日の3日間、アメリカ合衆国コロラド州ベア・クリークハイスクールの高校生のホームステイと、16、17日の本校での受け入れ」の打診が本校英語科にあった。3月末には本校専攻科英語キャンプでの英会話指導のために来日した、ベア・クリークハイスクールの教員2名と打ち合わせをする機会を得た。ベア・クリークハイスクール側の希望は、「柔道、剣道、書道など、日本の文化に触れる機会を持ちたい。その他についてはこちらに一任する」ということであった。

すぐに本校英語教員で話し合い、受け入れる方向で対応することを確認し、具体的な作業にとりかかった。

ホームステイについては、4月に本校学生の家庭に「ホームステイ受け入れのお願い」を配布し、その結果、本校学生の家庭5軒、本校英語教員の家庭

2軒、計7軒14名の受け入れ先が決定した。5月中旬に、受け入れ先家庭の学生を集めてアーク外語学園と本校教員による説明会を行った。その際にどのような生徒を受け入れたいか、性別・年齢などの希望を取り、すぐにベア・クリークハイスクール側に伝え、コーディネートに入った。5月下旬にはベア・クリーク側からの希望がアーク外語学園に連絡があり、6月初旬にホームステイする学生の最終リストをアーク外語学園から受け取り、各家庭に連絡した。

本校での交流については、6月に入るとすぐに、本校英会話担当のTony Stinson教員と英語教員4名で、6月16日（月）午前の合同英語授業の指導方法について打ち合わせを行った。この打ち合わせは3回行い、6月10日（火）に最終的な内容を決定した。

それと並行して6月9日（月）に茶道部、剣道部に協力を要請した。また、書道の松村教員にも授業へのアメリカ人学生の参加を要請して快諾を得た。6月13日（金）には、学校からの支援について、副校長、学生課長と詰めの打ち合わせを行った。

6月15日（日）に、アーク外語学園の主催により、因島の大浜公園でバーベキューパーティーが行われ、ホームステイする学生と受け入れ家庭との交流が行われ、いよいよ翌日6月16日（月）から本校での受け入れという運びとなった。

## 4. 本教育実践の概要

本教育実践に関する本校への来校者は、アーク外語学園主催の日本ツアーの一環で来日した、アメリカ合衆国コロラド州ベア・クリークハイスクールの高校生36名、引率教員5名、計41名である。この数字には、一部ネバダ州の姉妹校からの学生が含まれている。

本校におけるホームステイの受け入れ学生は14名で、本校学生の家庭5軒、本校英語教員の家庭2軒、計7軒が2名ずつの学生を受け入れた。ホームステイ受け入れ日程は、2008年6月15日（日）夕食時から6月18日（水）朝食時までであった。

6月16日（月）午前における本校1年生英語授業での交流、6月17日（火）午前における1年生選択書道授業での交流を、初年次教育におけるアクティブラーニングとして位置付けて実施した。本校商船学科1年生の在籍数は43名、電子機械工学科1年生は38名、情報工学科1年生は36名、また、1年生選択書道選択者は40名である。本教育実践についての詳細は次章に譲るが、プログラム全体の日程表は表1を参照されたい。

表1 アメリカ人高校生交流プログラム日程表

6月16日 月曜日	実施内容 (アメリカ人参加数)	場 所	担 当 教職員
8:40 ~ 9:30	M1 英語授業に参加 (20名)	マルチメディア教室	Tony Stinson, 英語教員*
9:40 ~10:30	S1 英語授業に参加 (41名)	第二体育館	Tony Stinson, 英語教員*
10:40 ~11:30	I1 英語授業に参加 (41名)	第二体育館	Tony Stinson, 英語教員*
昼 食 (13:30より本校副校長を表敬訪問 (3名))			
13:20 ~15:30	S3 実験実習見学、 練習船「弓削丸」見学、 練習船「はまかぜ」体験 乗船 (41名)	学校棧橋	商船学科教員、 練習船弓削丸 教職員

6月17日 火曜日	実施内容 (アメリカ人参加数)	場 所	担 当 教職員
8:40 ~ 9:30	M2 英語授業に参加 (10名)	M2 教室	坂 内
9:40 ~10:30	日本文化講義(書道、折 り紙を中心に) (41名)	マルチメディア教室	望 月
10:40 ~12:30	1年書道授業に参加 (平行して折り紙体験) (41名)	書道教室 視聴覚教室	松 村、 英語教員*
昼 食			
14:00 ~15:30	茶道体験 (41名)	青雲館	勘久保、 茶道部員
15:30 ~16:30	剣道体験 (41名)	剣道場	田 房、 剣道部員

\*英語教員：上江、野口、坂内、望月 (敬称略)

M→電子機械工学科, S→商船学科, I→情報工学科

## 5. 各教育実践の内容

### 5.1 6月16日(月)午前：1年生英語授業での交流

6月16日(月)は、1限から3限の電子機械工学科、商船学科、情報工学科1年生の英語授業に、アメリカ人高校生を受け入れた。通常は1クラスをそれぞれ3つのグループに分けて少人数で授業を行っているが、今回アメリカ人高校生を受け入れるにあたっては、グループ分けをせず、クラス全体を日本人英語教員4名と本校英会話担当Tony Stinson教員で担当した。

1限の電子1年の授業はマルチメディア教室で行い、アメリカ人高校生のホームステイ先がまちまちで本校に到着する時間が異なるため、アメリカ人高校生20名のみが参加した。ここではアメリカ人高校

生1名に日本人学生2名のグループを作り、日本人学生がアメリカ人学生にあいさつや自己紹介などに関する日本語を教えるという形で交流を図った。

2限の商船1年、3限の情報1年の授業は第二体育館で行い、アメリカ人高校生と引率教員41名が参加した。ここでは本校1年生とアメリカ人高校生の混合グループを作り、それぞれのグループに指示を書いたカードを渡し、そのカードの指示に従ってグループ内で本校1年生とアメリカ人高校生が協力して作業を行った。カードには日本語で指示が書いてあるものと、英語で指示が書いてあるものがあり、日本語の指示には本校1年生が英語で答え、英語の指示にはアメリカ人高校生が日本語で答えることとした。図1に、日本人学生(本校1年生)向けカードとアメリカ人高校生向けのカードの例を示す。

(日本人学生向けカード)

いま朝7時半です。あなたはアメリカから来たMaryさんと土生港で待ち合わせをして、弓削商船高専と一緒に登校します。朝のあいさつを英語でしましょう。その後、昨夜はよく眠れたか?英語で尋ねてみましょう。

(アメリカ人高校生向けカード)

You want to go to Citrus Park Setoda next morning. Ask your Japanese friend Ken to take you there in Japanese.

図1 活動指示カードの例



図2 体育館での活動の様子

### 5.2 6月16日(月)午後：商船3年の実験実習見学、練習船「弓削丸」見学、練習船「はまかぜ」体験乗船

6月16日(月)午後は、本校の船員教育に関する理解を深めてもらうことを目的に、商船学科教員、

練習船弓削丸教職員の協力を得て、アメリカ人高校生と引率教員41名を対象に、学校棧橋において商船学科3年生の実験実習風景と本校練習船「弓削丸」の見学、および練習船「はまかぜ」への体験乗船による、弓削島周遊を実施した。

商船学科3年生の実験実習については、救命ボートのつり下ろしとつり上げの訓練風景を見学した。続いて、弓削丸教職員および商船学科教員の協力を得て、練習船「弓削丸」の機関制御室と艦橋を中心に見学した。

最後に、練習船「はまかぜ」を利用して、弓削島を一周する乗船体験を実施した。アメリカ人高校生の中には、砂漠に囲まれた地域に居住している学生もあり、貴重な体験となった。



図3 練習船「はまかぜ」体験乗船の様子

### 5. 3 6月17日(火)午前：日本文化講義、書道、折り紙体験

6月17日(火)2限目に、アメリカ人高校生と引率教員41名を対象に、マルチメディア教室において、書道、折り紙などの日本文化について、英語で講義を行った。

まず、ホワイトボードに書いたひらがなを、受講生と一緒に発音練習を行った。受講生の大半は、アメリカの高校において選択外国語として日本語を学んでおり、ひらがなを大きな声で正確に発音することができた。次に、日本語には、ひらがな、カタカナ、漢字の3種類の文字があること、ひらがな、カタカナは表音文字である一方、漢字は表意文字であることを説明した。また、「木」「森」「月」などの基本的な漢字を例に、絵を描きながら象形文字の説明を行った。次に、元来、日本語には文字という概念がなく、平安時代に、漢字を草書体にくずし書きしたものを変形させて、ひらがなが発明されたことを、「安→あ」「以→い」「字→う」などの実例を挙げながら説明した。「ひらがなの元の漢字である「奴」「奈」「於」は、それぞれどのひらがなに変化したか？」というクイズゲーム形式の問いかけに対

して、受講生は一生懸命推測しながら答えを発表し、活気溢れる授業となった。(答えは「ぬ」「な」「お」)続いて、視聴覚教室に移動し、予め教卓に準備しておいた書道用具を用いて、「山」「川」「なみ」などの作品を実際に筆で書きながら、筆の持ち方、硯の使い方、文字の書き方(始筆、終筆など)を説明した。受講生には教卓の近くに来てもらい、間近で書道のデモンストレーションを熱心に見学しながら、説明に耳を傾けていた。その後、指を筆に見立てて文字を書く練習、次に筆に墨をつけずに文字を書く練習を受講生と一緒にを行った。

最後に、3,4限目に予定されている書道と折り紙の体験授業を円滑に進めるために、グループ分け(A班20名、B班21名)を行った。1年生の芸術科書道選択授業(担当：松村教員、選択学生40名)にアメリカ人高校生41名全員が一緒に参加すると、合計81名となり、書道教室で全員が一斉に受講することができない。このため、松村教員と事前に打ち合わせを行い、2班に分けて、A班(アメリカ人20名、本校学生20名)は3限目に書道、4限目に折り紙、B班(アメリカ人21名、本校学生20名)は3限目に折り紙、4限目に書道を、それぞれ体験することとした。書道は書道教室、折り紙は隣の視聴覚教室において、それぞれ体験実習を行った。

アメリカ人高校生と本校1年生がそれぞれ1人ずつ、2人のペアをつくり、本校1年生がアメリカ人学生に対して、書道の書き方と折り紙の折り方を英語で教え、書道の説明と質問対応は書道科の松村教員が、折り紙の説明と英語のやりとりに関する質問対応は、英語教員4名が担当した。折り紙指導については、事前に国語の猪川教員より資料提供とアドバイスの協力を得た。

最初に、英語と日本語を交えながら、互いに自己紹介を行い、趣味や学校生活について話し合った。本校1年生にとっては、自己紹介や、書道と折り紙の説明を英語ですることに最初はかなり苦労した様子であったが、時間が経つにつれて、会話も弾み、英語を実践的に用いる良い機会となった。

アメリカ人高校生は、好きなことばを決めて筆で書く練習をし、色紙に筆で清書した作品に、折り紙の作品を糊できれいに貼り付け、作品を仕上げることを課題とした。出来上がった作品は、お土産として持ち帰ってもらうことにした。

地元の上島町職員とケーブルテレビが取材に来られ、書道や折り紙を通してアメリカ人高校生と本校学生が楽しく交流する様子が、広報かみじま8月号に掲載され、また上島町CATV弓削局11Ch(ゆげチャンネル)KCNニュースにおいても6月24日に放映された。



図4 書道体験の様子



図6 茶道体験の様子



図5 折り紙体験の様子



図7 剣道体験の様子

#### 5. 4 6月17日(火)午後：茶道、剣道体験

6月17日(火)午後には、日本文化に関する理解を深めてもらうことを目的として、アメリカ人高校生と引率教員41名を対象に、茶道と剣道の体験を実施した。

茶道体験は、本校図書館の勘久保職員、茶道部の協力を得て、本校厚生施設青雲館において実施した。アメリカ人高校生は20名、21名の2班に分かれ、和装姿の茶道部員より、茶道の作法を学んだ。

茶道体験の後は、剣道部の協力を得て、本校の剣道場において剣道体験を実施した。剣道体験は、まず剣道部員達が、アメリカ人高校生や引率教員に防具の着装法を教えることから始まった。部員達は、英語や身振り手振りを交えながら、彼らと円滑にコミュニケーションを図っていた。続いて、竹刀の素振り練習や、部員を対戦相手とした実戦形式の練習を体験した。アメリカ人高校生や引率教員達は皆、熱心に取り組んでいた。最後には、剣道部員同士のエキシビジョンマッチを観戦した。

茶道においても剣道においても、アメリカ人高校生や引率教員達は、終始、生き生きとした表情で活動に取り組んでおり、日本文化を実体験するよい機会となった。それと同時に、茶道部および剣道部の部員達にとっては、日本文化をアメリカ人に英語で伝えるという貴重な体験となった。

#### 5. 5 ホームステイの受け入れについて

本校学生5名、本校英語教員2名、計7名の各家庭が、ホームステイのホストファミリーとして、2人ずつアメリカ人高校生を受け入れた。本校全体で14名のアメリカ人高校生を各家庭に受け入れた。期間は6月15日(日)夕食時から6月18日(水)朝食時までの3泊4日である。

アメリカ人高校生とホストファミリーとの初めての顔合わせは、6月15日(日)正午より、因島大浜公園にて、アーク外語学園の主催で、野外バーベキューの形式で行われた。自分の言いたいことを英語でどのように表現してよいか分からず、すぐに英語教員に頼る本校学生もいたが、短く簡潔な英語で話してみることに、電子辞書を有効利用すること、ジェスチャーも交えて自分から意思疎通を図ろうと努力することをアドバイスした。初対面のときは緊張していた本校の学生達も、午後2時の解散時には、ホームステイの学生と一緒に遊びに行く約束をするなど、かなり打ち解けた様子であった。

14名のアメリカ人高校生は、6月16日(月)17日(火)の2日間、各家庭から本校学生または英語教員と一緒に登下校し、本校での交流プログラムに参加した。その他のアメリカ人高校生、引率教員27名は、アーク外語学園の受講生の家庭などにホームステイし、本校での交流プログラムに参加した。

### 6. 事後アンケートの集計と考察

本教育実践の教育的効果の検証と、今後のより良い交流プログラムづくりを目指して、プログラム終了後の7月中旬に、商船学科、電子機械工学科、情報工学科1年生全員を対象に、また、ホームステイを受け入れた学生、教員の家庭を対象に、無記名方式でアンケートを実施した。

まず、1年生全員を対象としたアンケート結果(5項目)と、学生の主な感想と要望について考察する。図8を参照されたい。

項目1に関して、学生の5.7%が「よくなかった」「あまりよくなかった」と否定的な感想を持っているものの、学生の73.3%が「とてもよかった」「よかった」と肯定的な感想を持っていることは、今回のアメリカ人高校生との交流プログラムは、初めての試みとしては、一応の成功を収めたと考えられる。項目2に関して、「とてもうまくできた」「うまくできた」と回答した学生が19.0%にとどまり、学生の60.0%が「あまりうまくできなかった」「うまくできなかった」と回答したことは、多くの学生にとって、英語を用いて実践的なコミュニケーションを図る機会が不足していることを示唆するものである。

項目3-1と項目3-2に関して、アメリカ人高校生に日本語を教える活動を行った電子機械工学科1年生と、アメリカ人高校生と互いの母語である日本語と英語を教え合う活動を行った商船学科と情報工学科1年生の、「とてもよかった」「よかった」と肯定的な感想を持つ学生の割合は、前者が33.4%、後者が62.6%と大きな差が生じた。これは、前者では時間割編成の関係上、活動にゲーム的要素を入れず、アメリカ人高校生に対して、単に基本的な日本語を教えるだけの活動となったことが大きな原因であり、今後の反省としたい。一方、後者では、多くの学生がゲーム活動への参加を通じて、アメリカ人高校生と日本語と英語を用いて、楽しく交流できたことがわかる。記述式の感想には「ゲームが楽しかった」「またやってみたい」「アメリカ人は優しかった」「アメリカ人は日本語が上手だった」「アメリカ人高校生と交流できてよかった」「国境を越えて共感できるものがあった」など多くの肯定的な意見が見られる中で、「ルールが少し分かりにくかった」「英語が苦手なのに、外国人との交流は困る」といった感想も見られ、英語に対して強い苦手意識を抱いている学生に対する指導のあり方や、より取り組みやすいゲーム活動の考案が検討課題となった。

項目4について、学生の71.4%が「とてもよかった」「よかった」と肯定的な感想を持っていることから、多くの学生が書道と折り紙の活動を通じて、アメリカ人高校生と楽しく交流できたことがわか

る。記述式の感想では、「折り紙や習字など、楽しく交流できた」「日本のいい思い出にできたと思う」「日本のことを教えることができて良かった」といった感想が多く見られたが、「最初はとても緊張した」「教えるのが難しかった」といった率直な感想も見られた。また、「よくなかった」「あまりよくなかった」と否定的な感想を持つ学生が9.5%いることから、書道と折り紙をよりスムーズに英語で教えることができるように、事前に実用的なやさしい英語のフレーズを練習するなどの改善が今後の検討課題となった。

項目5について、今後もこのような外国人学生との授業での交流について、「強く希望する」「希望する」学生が46.7%、「希望しない」「あまり希望しない」学生が14.1%であった。外国人学生との交流を強く希望する学生の割合が更に高まるように、プログラムの内容をより充実させていくことが今後の検討課題となった。

最後に、アメリカ人高校生のホームステイを受け入れた家庭へのアンケート結果について考察する。

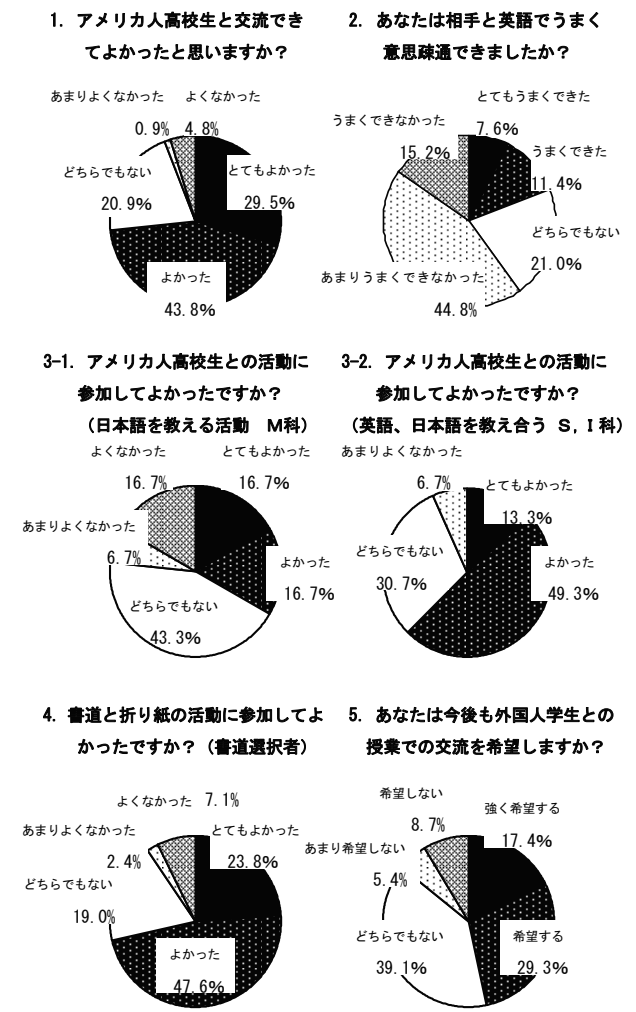


図8 「交流プログラム」事後アンケート結果

どの家庭もホームステイを受け入れて「とてもよかった」「よかった」と回答しており、その理由として、「家族が増えて楽しく過ごせた」「異文化交流ができた」ことを挙げている。また、ホームステイ受け入れについて困難に思われたことに関して、「英語での意思疎通」「食事、お風呂、シャワー、ベッドのお世話」を挙げる家庭が多かった。その他、記述式の感想、要望として、「期間が短すぎたので、もっとたくさん話をする時間が欲しかった」「食事について、肉が食べられないなど、事前にアンケートなどで分かっていたら、準備がしやすかった」という率直な意見が寄せられ、改善に向けて今後の検討課題としたい。

## 7. まとめと今後の課題、展望

アンケートの結果からも明らかなように、多くの学生が今回の交流プログラムを肯定的に捉えており、また、普段の英語学習への動機づけにもなっているという点から見ても、アメリカ人高校生との交流を今後も継続していきたい。

一方で、目の前にアメリカ人高校生がいれば、日本人学生側の他者と対話しようとする意志が喚起され、オーセンティックな環境の中で英語による実践的なコミュニケーションを図る機会が与えられる、と単純に考えていたのではないかという点は反省する必要がある。もちろん、今回のアメリカ人高校生との交流は、本校学生の英語学習に対して、直接交流活動に参加しなかったクラスの学生に対してさえも、肯定的な影響を与えたことは間違いないが、アンケートの結果と回答した1年生が関わった活動とを検討してみると、単に「そこにネイティブがいればよい」というわけではないということが分かる。

月曜1限の活動、月曜2・3限の活動、火曜3・4限の折り紙と書道に参加した学生の、それぞれの活動に対する肯定的な意見は「月曜1限<月曜2・3限<火曜3・4限」である。この結果は、実際の活動の様子を観察した結果とも一致している。日本人の学生がアメリカ人の高校生に日本語を教える活動よりも、日本人とアメリカ人がお互いに母国語を教え合う方が、さらには両者が協力して折り紙や書道といった作品を作り上げるといった活動の方が、活発なコミュニケーションが行われていた。つまり、オーセンティックな環境の中で英語による実践的なコミュニケーションを図る機会を与えるためには、日本人学生だけでなく、アメリカ人側の他者と対話しようとする意志も喚起する必要がある。これは対人コミュニケーションの双方向性を考えれば当然のことで、英語教員側としては、協同作業などのような日本人学生とアメリカ人学生の双方にとって意味

のあるコミュニケーションが求められる状況を用意する必要がある。以上を踏まえ、学生がより楽しく活発にコミュニケーションできる活動を考案していきたい。

本教育実践は、アメリカ人高校生との交流を通して、本校初年次学生の国際的視野を育むことを目的として計画したが、2日間に渡る交流プログラムの中で、本校1年生が授業中にアメリカ人高校生と交流した時間は、芸術で書道を選択している学生は3時間、その他の学生は1時間にすぎない。今回は平常授業時間割の枠組みを維持しつつ、各授業をうまく遣り繰りしながら、交流プログラムを計画したが、今後はアメリカ人高校生来校日の1年生の平常授業を変更して、終日交流特別プログラムに充てるなど、学校全体としての取り組みに発展させることができれば、国際的視野を持つ人材育成を目指したアクティブラーニングを更に進化させた初年次教育が実施できると考えられる。

最後に、今後は初年次学生のみならず、本科生全学年に、さらには本校専攻科において2007年度より実施されている「専攻科英語キャンプ」とも連携しながら、専攻科生に対しても実施の方向を探りたい。

## 参考文献

- 1) 濱名篤、川嶋太津夫(編)。(2006)。「初年次教育 歴史・理論・実践と世界の動向」, 東京: 丸善。
- 2) 初年次教育学会。(2007)。「設立趣意書」, 2008年9月27日検索。  
<http://www.soc.nii.ac.jp/jafye/shuisho/index.html>
- 3) 関西国際大学。(2008)。「平成18年度 文部科学省 特色ある大学教育支援プログラム(特色GP) 『初年次教育の総合化と学士課程教育への展開』」, 2008年9月27日検索。  
[http://www.kuins.ac.jp/kuinsHP/extension/koho/2006/gp2006\\_t.html](http://www.kuins.ac.jp/kuinsHP/extension/koho/2006/gp2006_t.html)
- 4) 朝日新聞。2008年6月3日。「初年次教育で、やる気-全入時代-」, 2008年9月27日検索。  
<http://www.asahi.com/edu/university/zennyu/TKY200806020193.html>
- 5) 有本 明。(2008)。「教育レポート-いま問い直す、大学での学び~“高校4年生”から“大学生”へ-第2回初年次教育」, 2008年9月27日検索。  
[http://benesse.jp/berd/magazine/report/2006/arimoto01/arimoto02report\\_01.html](http://benesse.jp/berd/magazine/report/2006/arimoto01/arimoto02report_01.html)
- 6) 堀口正之、濱中俊一、上江憲治、藤井清治、坂内宏行、石橋洋二。(2008)。「初年次学生の多様化する学習経験を改善するための教員の連携

と実践』『論文集「高専教育」』31: 759-764.

- 7) 伊藤武志、濱中俊一、山尾徳雄、上江憲治、藤井清治、大石健司、田頭章司、園部元康。(2008). 「初年次における課題学習を活用した創造性教育の実践」『平成20年度機構主催教育教員研究集会論文集』323-326.
- 8) 弓削商船高等専門学校.(2008). 「本校の教育方針」. 2008年9月27日検索.  
<http://www.yuge.ac.jp/>
- 9) 高木 智.(1993). 『おりがみ 古典にみる折り紙』. 東京: 日本折紙協会.
- 10) 日本折紙協会編.(2005). 『おりがみ 4か国語テキスト』. 東京: 日本折紙協会.
- 11) 狩田卷山.(2005). 『平成17年度 文部科学省認定 硬筆書写検定1・2級合格のポイント』. 東京: 日本習字普及協会.
- 12) 関岡松籟.(2005). 『若がえる お習字』. 東京: 木耳社.